第 13 章　薬物療法 1(経口糖尿病薬) セルフ学習問題

以下の文章について、( ) 内に当てはまる語句、数字を記入してください。

１．糖尿病の治療の原則は（　①　）療法や（　②　）療法だが、血糖コントロールが不十分な場合に薬物療法を開始する。
２．（　③　）や速効型インスリン分泌促進薬（グリニド薬）の服用タイミングは食直前である。（　③　）は糖質の（　④　）への分解を抑制するため、食後の急な血糖上昇を抑制する。主な副作用は、（　⑤　）、放屁増加、下痢、重篤な（　⑥　）などである。低血糖が起こった場合の対処法は単糖類の（　⑦　）を摂取する。
３．メトホルミンはヨード系造影剤と併用すると（　⑧　）を起こす可能性があるため、造影剤施行前後 48 時間程度はビグアナイド薬の投与を一時的に中止するなどの処置が必要である。
４．SGLT2 阻害薬は、（　⑨　）の再吸収を阻害し、尿糖として排泄することで血糖値を低下させる。副作用のうち（　⑩　）は女性に多い。脱水のリスクがあるため水分補給が大切であり、（　⑪　）には服用を中止する必要がある。
５．チアゾリジン薬の副作用は（　⑫　）や心不全などがある。海外で実施した糖尿病患者を対象とした疫学研究において、（　⑬　）による膀胱癌の発生リスクの増加が懸念されており、膀胱癌治療中の患者には投与を避ける。
６.イメグリミンは（　⑭　）依存性のインスリン分泌促進作用と、肝臓、骨格筋での（　⑮　）を改善するという２つの作用により血糖降下作用を発揮する薬剤である。主な副作用としては（　⑯　）がある。
７．GLP-1 受容体作動薬や（　⑰　）はインクレチン関連薬であり、週に 1 回投与する製剤がある。GLP-1 受容体作動薬は皮下注製剤が多いが、経口の（　⑱　）という製剤もある。GIP/GLP-1 受容体作動薬の皮下注製剤として、（　⑲　）が 2023 年 4 月に発売され、血糖降下だけでなく（　⑳　）作用を示すことが注目されている。吐き気や便秘などの消化器症状のほか、（　㉑　）の副作用に注意が必要である。
８．スルホニル尿素薬や速効型インスリン分泌促進薬は膵 β 細胞からの（　㉒　）分泌を促進して、血糖低下作用を発揮する。（　㉓　）以外の副作用が極めて少ない。（　㉔　）非依存状態の患者に用いる。
９．一般に経口糖尿病は、（　㉕　）、（　㉖　）など重篤な急性期症状を有する際には使用しない。
１０．薬剤を適切に選択し、組み合わせて使用することで、健康な人に近いインスリン分泌動態を再現し、無駄なインスリン分泌や（　㉗　）の疲弊を来たさない薬物療法実践が期待される。